

---

 <書 評>

## 車 い す

大川嗣雄・伊藤利之・田中 理・飯島 浩〔著〕

加倉井周一（帝京大学助教授）

車いすは国際的な障害者用建築基準のシンボルマークに象徴されるように、下肢機能障害者・老人などの移動手段として我が国の社会にすっかり定着しているだけでなく、国が福祉サイドで支給している補装具の中でももっとも数多い種目の一つであり、代表的なリハビリテーション機器である。

このようによく知られているにもかかわらず、車いすの具体的な事項—例えばどのような患者にどのような種類の車いすを処方すべきか？・自家用車に搭載できる車いすのサイズは？・車いすの操作訓練方法・さらには車いすの手入れなど—になると、残念ながら一部の専門家のみにまかされてしまう傾向にあることは否定できない。つまり医療スタッフの車いすに対する実際的な知識は意外に少ないのが実状である。

今回、横浜市立大学リハビリテ

ーション科の大川嗣雄教授を中心とする横浜市立大学グループと長年の車いすに関する研究で定評のある神奈川県総合リハビリテーションセンター・リハビリテーション工学科の方が共同執筆された『車いす』は、この領域での我が国初めての書物であり、急速な高齢化社会を迎えようとしている今日においてその刊行の意義はきわめて大きいものと言えよう。本書はB5変形版で索引も含めて147ページというコンパクトな書物ではあるが、その内容は、①我が国における車いすの歴史（なかなか労作である）、②車いすの種類、③基本構造、④処方、⑤基本訓練、⑥電動車いすと自動車、⑦いすと環境、⑧車いすの科学、⑨資料、から構成されており、豊富な写真と図表のせいもあるが非常に読みやすい点に特徴がある。

まえがきによれば、本書は専門家

から障害者までを対象としているとのことであるが、もっとも必要な読者は、患者に対して「車いす」とだけ処方を出して後はセラピストや製作業者にまかせきりの医師であり、彼らにぜひ薦めたい（おそらく執筆者もそのような思いをもっているものと推察している）書物である。

強いて本書に注文をつけるとするならば、①車いすと座—とりわけ重度障害者に対する seating system の説明がやや不足していること、②もっと処方にページを費やしてもよかったのでは—特殊な患者—例えば脊髄損傷者に対するクッションなど、③車いすとスポーツの章が加わるとよい、などが考えられ、将来改版の機会があればぜひ取り上げていただきたいものである。

従来車いすに関するまとまった書物は Kamenetz の “Wheelchair Book” (Thomas, 1969) しかなかったが、本書はオリジナルな日本語版として多くの方々にぜひ利用していただきたい一冊である。

（B5横判，頁158，図89，  
写真185，¥3,700，〒300，  
1987年，医学書院刊）